会の仕事を手伝っていたので北垣先生が口語体に訳されたデイヴィス先生著『新島襄の生涯』を校友会から出版する事に携わっていた。その時に本に挿入されている十四点の挿し絵は、一般的に「銅版画」と思われていたようだが、よく眺めて見ると、銅版画ではなく、木版画であることに気が附いた。この版画は、当時仏蘭西に行きその技術を会得して帰って来た、合田清（後に東京芸大の教授となる）の指導によって製作された「西洋木版画」であることが判った。

普通木版画と言えば「板目木版」のことで板目木版とは、板にした板木に下絵を張って彫る手法である。これに対して西洋木版画（木口本版）は木を輪切りにして木の横断面の芯の部分に彫刻する方法である。

板目木版より、材質的に一層堅いので陰影などを作るには適している。

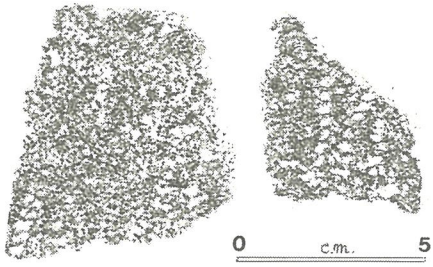
挿入されている絵はこの西洋木版によって製作されたものであることを発見したのである。これも多少、浮世絵に興味を持っていた「余徳」かと思って感謝しているのである。

（元本部庶務部長）

同志社校地出土の埋蔵文化財（20）

縄文式土器片拓影

鈴木　重治



縄文時代
同志社女子大学図書館地点
1976年6月16日、出土
右側4.5 cm × 4 cm，厚さ0.8 cm

同志社の今出川キャンパスから出土した考古資料のうち、もっとも古い土器がここに示した縄文土器の破片である。

女子大学のゼームズ館前の地点に、半地下式の図書館を建築するに先立って発掘調査をした際に、出土した資料である。すでに攪乱していた土坑中や、砂礫層中から発見されたこれらの土器片は、六片が確認されたが、すべてが接合した為、同一個体の一部であることがわかった。器面の磨滅がいちじるしく、文様構成は不明であるが、それでも部分的に特徴的な文様をうかがうことのできる資料である。

拓影の右側の破片は、外面の中央部に縦位置に三条の縄文を認める資料で、縄文自体は粗い単節で左下りが確認できる。裏面は横走する擦痕が残り、接合後の観察から頸部から胴部にかかる部分の破片であることが認められた。左側の破片は、上端部が丸味をもった口縁部に当り、器面に残る文様は、頸部に寄った左下の部分にのみ、一条の縄文を認めるにすぎない。この縄文も、粗い単節の縄文で左下りに施文されている。つまり、共通の方法によって同一の施文具で文様がつけられたことになる。砂粒を含んだ胎土は、灰褐色を呈していて、京都盆地出土の縄文土器によくみられる素地を示している。

北白川遺跡、一乗寺遺跡、上加茂遺跡などの京都を代表する縄文時代遺跡からの出土資料とともに、縄文時代の生き証人でもある。（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）